



会議レポート

研究者人生を変える IPSJ-ONE

IPSJ-ONE とは

2015年3月17日から19日にかけて開催された本会第77回全国大会は、京都大学で開催された。その中でひととき目立ったイベントがこのIPSJ-ONEだ。初日の午後、第1イベント会場である百周年時計台記念ホールを満員にし、多くの立ち見まで現れたこのイベントがどういうものであったか、実行委員や登壇者のインタビューとコメントを交えてお伝えする。

「多様な研究分野を垣根なく俯瞰し、すぐれた研究を自らの言葉で語るプレゼン力の高い、若手を中心とした研究者」による「見逃せない講演会」と題されたIPSJ-ONEは、19人が持ち時間5分で次々と登壇しプレゼンテーションを行うというスタイルで行われた。全国大会において異彩を放ったこのイベントは、500人収容の会場を満員にするだけでなくとどまらず、動画中継がされたニコニコ生放送では視聴者が40,000を超えるなど、大きな成功を収めた。

仕掛け人は本会の新世代企画委員会。そして運営委員長は東京大学（現筑波大学）の落合陽一氏、副委員長は慶應義塾大学の稲見昌彦教授。まずはそのお2人にお話を伺った。

委員長、副委員長インタビュー

聞き手：角 康之（はこだて未来大）、金岡 晃（東邦大）
インタビューはIPSJ-ONE終了直後、時間を縫うように行われた。

まずは率直な感想から

一大盛況に終わったIPSJ-ONE。直後で興奮冷めやらぬ状態ですが、まず率直に現在の感想をお聞かせください。

落合：昨日のリハーサルの最初の段階だとどんな発表になるかすごい不安で、普通の学会の登壇っぽくなってしまわないじゃないかと思ってたけど聴衆が凄いい良かった、Webとちゃんと連動していた。登壇者さんたちが全員ブラッシュアップした登壇原稿にして持ってきてくれたのでいつもの



図-1 実行委員長の落合氏（右）と副実行委員長の稲見教授（左）

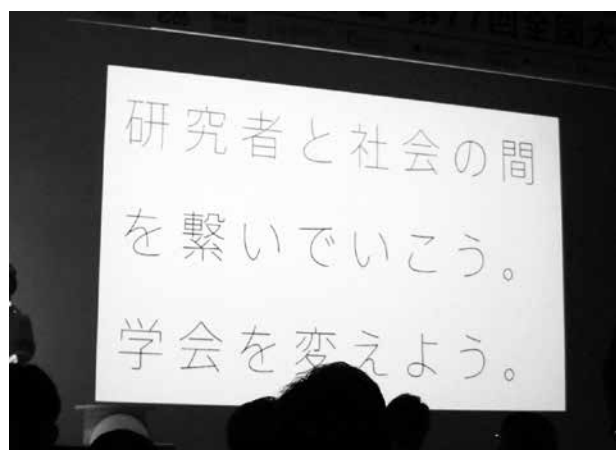


図-2 掲げられたメッセージの1つ

学会がぜんぜん雰囲気の違い、なんかTED (Technology Entertainment Design) ライクな、でもTEDより詳しい話が聞けるセッションになったなと思いました。

稲見：私の場合は純粋に、一研究者というか技術好き、面白い話好きとして、Audienceとして楽しかった。司会とかやめて純粋に集中して聞きたかった（笑）。あとでタイムシフト見ないと^{☆1}。

企画立ち上げから開催に至るまで

一立ち上げからの経緯を聞かせてください：

落合：最初はTED×IPSJをやろうって言ってた。その後で、自らイベント立ち上げてブレイクする面白いのができるようなら、そっちで行こうということになって、各研究会から選んでもらって、委員会推薦も入れて、プレナリーなトークセッションを自ら企画しようと、途中で路線変更しまして、結構これは賭けで、つまらないイベントな感じになっちゃったら本当に「TED風なことやって寒いな」と思われちゃうなと思うんですけど、そこを寒くないようになんとかブランド感を立ち上げられたのが、すごく面白かったのかな、と思います。

稲見：最初は新世代企画委員会の中で、情報処理学会の大会をどんどん改革していく、という中の1つの案として出てきた。「分野横断型プレナリーセッション」という名前だったけど、情報処理学会のトップヒッターの人たちが集

^{☆1} IPSJ-ONEはニコニコ生放送で生中継されたあと、アカウントがない方も1カ月（4月19日まで）タイムシフトで閲覧可能でした。

まったという形にしたかったので「IPJSJ-ONE」という名前に、新世代企画委員会が立ち上がり、6月あたりから実行委員の構成や登壇者の選択方法、登壇者数などフォーマットを決めて、分野を偏らないようにするのはどうするのか、と、研究分野によってはあまり画になる研究がやりにくいという話などを伺っていたが、かえってデモやビデオがない方々が実はものすごい説明が得意だったりして、皆さんそういうところでプロとしてやってらっしゃってなんらかの力は持っているはずなので、懸念はなかった。やはりそれはうまくいったと思います。

落合:大学の偏りも分野の偏りもなかった。審査基準としては、「僕が見たい」「僕が見せたい」の軸で決めて、それがちょうどよくばらけて、

稲見:分野としていかに広がりを見せるのかも大事で、一番配慮したのはダイバーシティ。それが形の部分。中身としては落合君の言った「見たい」「見せたい」。

—制約は2時間がいちばん強い制約？

落合:そうですね。その中で「1人5分」と、普通だったら20分くらい話すような人たちを集めたんですけど、全員5分にしようと、その制約のおかげで聞いているほうは飽きずに眠らずにエッジが効いて、普通の業界だとLT(ライトニングトーク)とか言われるものだけですけどすごい入念に準備したLTにしようと、

—リハーサルをするのは最初から決めていた？

落合:リハは絶対しようと、

稲見:スライドも早めに提出していただいて、場合によっては変えてもらう、と、

—リハーサルとガラッと変わった方が何人もいて、

稲見:昨日リハ聞いているはずなのに、面白い(笑)。プレゼンのコメントももらうって、みなさん一人前の研究者ですから指導などをやっても、ご自身に関しては…

落合:そう。自分に対して言われることってない。

稲見:そこまで含めて準備をすると、研究者にスイッチが入る。そのスイッチが入った状態が、このイベントの成功を決めるんですよ。

落合:隣の人が面白いのに連鎖反応でつられて「俺も面白くないと！」ってなっていったのが、リハの意味があったところかなと、

稲見:ほんとはリハーサルも流すと面白いのかも、

落合:じつは…ツイキャスで流していたんですよ(笑)

稲見:(笑)それを見ると、比較が分かって、目に光がはいると研究者はたった一晩でこれだけ変わるんだって分かる。

新たな試み：ニコニコ生放送との連動について

—ニコニコ生放送で、というのも新しい話だった。これはいつから決まっていた？

落合:最初から。画面の向こうにきっと数万人見る、とあらかじめ予想はして、数万人がどういう体験をするかっていう方向にデザインされてた。



図-3 立ち見まで出た会場

—今回の視聴者は4万超え。もともとの予想は？

落合:5万か4万か。

稲見:数万は行ってほしいなと思っていた。ある意味専門性が高い内容なのに、2時間のイベントで数万は多い。また、日本語でやるならばYouTubeとかUstreamじゃなくニコ生が一番よかるう、っていうのもあった。メディアの性質として学部生・高専生の層が厚く、情報処理学会が訴えかけたい人たちと視聴者層とかぶっている。

落合:TEDだと高尚な感じがしちゃうじゃないですか。あれは視聴者数伸びないんですけど、ニコ生だとほぼテレビなので、視聴者数も伸びるだろう、と、

稲見:分かりやすいところは「面白い」とダイレクトに反応があって、面白かったですね。

落合:「キーボード飛んだwww」とか(笑)「ピアノをパスしたww」とか。

稲見:あれも一晩で仕上げましたものね。リハのときは1枚の静止画だった。

—そういう動画を追加してるのに、きちんと5分に収めてくるといふ。

稲見:ほんとに良くなった。

落合:ウケてましたね。

そして今後の話。聞き手も参加する座談会に。

—IPJSJ-ONEの今後についてお聞かせください

落合:今後のことは何も決まってるはないが、一般に周知できるこういうイベントはやっていかないといけない。TEDがリーチする層と学会がリーチする層は実は近い。ニコニコがリーチする層はもうちょっと違う。イベント好きの層。その中間として学会がやるべきことをやる。社会に対して発信する、ってのを重点的にやっていかないと、と思います。

稲見:大学用語で言うFD(Faculty Development)に近いところもあるかな、と。実は視聴者は普段我々が授業やっている相手なわけで、彼らが内職しているか、聞いてコメント書いてるので、全然違いますよね。話し方も参考になりますし、たぶんこれを授業で使う先生が増える。これ自体を教材にして、学科振り分けとかそういうときに学科の宣伝とか、新生の総合学習などで流すとか。

落合:動画で5分で自分の研究テーマが伝わるなら、それ

は最高のデータツール。そうやって自分の研究を世の中に問う、というのを続けていきたい。

稲見: 研究者側がこれを見ることで、最初のときは尻込みしていた方も「こうやればいいのか」となって…。研究者側も発表を工夫できる点がまだまだあるという隠された目的もあって。

— (金岡) 予想もしなかった副産物がありまして、私の家族もニコニコ生放送を見てました。子供たちがタブレットで IPSJ-ONE を見ている写真を、妻が送ってくれて、そういうリーチもあるのだと。

稲見: 実は家族に研究を見せる機会ってなかなかないですもんね。こういった感想も、スピーカーの方々がいろいろなところで話をさせていただいて、そうして「じゃあ今度は自分も」と手が挙がってくるときっとまた次も見えてくる。

— (角) 「なんだこんななるんだったんだ」みたいな。悔しがられるくらいが良いでしょうね。

— (角) 高校生とか、裾野を広げるまたとないコンテンツになった。

— (金岡) 高校の先生に見せるというのも良いですね。

稲見: そうですね。高校の先生も「情報学とは何か」って全体像や最先端の研究事例を生徒になかなか伝える機会がないと思いますよ。プログラミングに関しては教えていただけたとしても。

— (角) 司会やりながら、悔しいとかは？ プレゼン側に立ちたい! ってなったとか。

落合: 研究の話は TED とかで話をしているから、それよりは、場を新たに作るほうに興味があった。

稲見: 逆に「我々だけじゃないよ」というのを示したい、と。

落合: そうそう。メディアに出やすい研究者って方向に偏っちゃうので、そこを減らしたくて。

— (角) 今回若手、って方向を向いているんだけど、若手だけじゃなくむしろなんか 50 ~ 60 代のひとたちでこういうのってあるんですかね、マスターズ。

稲見・落合: あると思いますよ。

— (角) : 70 歳くらいの方が 5 分で話すとか、なかなかないですよ。リハーサルでダメ出しとかしちゃって、大御所に対して。

落合: きっと楽しいだろうな。和田英一先生がパラメトロンの話したりとか、ハッピーハッキングキーボードとか。

稲見: たいいていキーノートで 1 時間になるところを、短く、スパンと。

…以下、楽しいながらも発散してきたため、インタビューを良きところで終了した。

実行委員の方々の声

落合氏と稲見先生から、本レポート執筆にあたり「ぜひ実行委員の声を載せてあげてくれ!」と強い声があった。実際、実行委員の方々はそれぞれがその分野において



図-4 実行委員の顔ぶれ



図-5 舞台裏の風景

線級で活躍する研究者であり、非常に精力的にこのイベントを運営していた。登壇者の 1 人としてあらためて深い感謝を述べるとともに、委員の方々からいただいた感想の声をご覧いただく。

■開催まではどうなることかと思いましたが、各研究会から推薦されただけあってどの登壇者の発表も分かりやすく面白く、2 時間のセッションがあっという間でした。感動しました。

情報処理学会の歴史の中で新たな 1 ページになりそうなこのイベントにかかわることができて、とても嬉しいです。

湯村 翼 (北陸先端科学技術大学院大学)

■ Web まわり全般を担当し、当日はニコニコ生放送で遠隔参加しました。一流の研究者が自分の言葉で研究について熱っぽく語るさまはとても格好良かったですね。自分がどのような研究者になりたいか、改めて考える機会にもなりました。

参加、視聴して下さった方に、研究者個々人の、そして情報科学という研究分野の持つ魅力と迫力が伝わっていたら嬉しいです。

加藤 淳 (産業技術総合研究所)

■ 「将来自分自身が発表したくなる場を作る」という気持ちで、運営に携わりました。登壇者の方々から「発表して良かった!」という声をいただき、非常に嬉しく思います。

杉浦裕太 (慶應義塾大学)

研究者人生を変えるステージ

IPSJ-ONE の各発表は再編集され、アーカイブされる。

読者の皆様も閲覧が可能であると考え、それぞれの登壇者や発表タイトル、そしてその内容については割愛した。詳しくは IPSJ-ONE の Web サイト^{☆2} をご覧いただきたい。

IPSJ-ONE のサブタイトルで掲げられていた「研究者人生を変えるステージ」は大きすぎる看板ではないことを、登壇者の声に乗せてお伝えし、この文章を閉じる。

■楽しいエキサイティングな機会を作ってください、ありがとうございました。今後、皆様とコラボレーションする機会が作っていければと思っております。

瀬々 潤 (産業技術総合研究所)

■皆様の魅力のある研究内容と洗練されたご発表の前では、私の発表はたどたどしくお恥ずかしい限りでありました。司会の落合さん、稲見先生の幕間のフォローや、後藤さんを始めとする運営の皆さんの綿密な準備とお膳立てのおかげによりましてあの素晴らしい時空間が構成され、その場にいられたことは本当に光栄です。

木谷友哉 (静岡大学)

■私自身特にニコ生などに出たことはなかったため、最初



図-6 実行委員と登壇者の皆様

は今回の企画にとってもおよび腰だったのですが、実際に皆さんと今回のイベントに参加して、研究のアウトリーチをどう真剣に考えていくべきか、また取り組んでいくべきかということについてとても勉強になりました。また大変恥ずかししながら、他分野のことを知るよい機会ともなりました。

吉野幸一郎 (京都大学/日本学術振興会)

(金岡 晃/東邦大学)

^{☆2} <http://ipsj-one.org/>

